

地域情報（県別）

【山梨】「やぶ医者大賞」受賞医師がへき地医療に携わり続ける理由-市川万邦・南部町医療センター所長に聞く◆Vol.1

2020年5月8日（金）配信 m3.com地域版

人口約7600人、高齢化率41.7%の山梨県南部町。いわゆる「へき地」と呼ばれる場所で、行政や医療・福祉の多職種と協力しながら総合診療や在宅医療を行っている医師がいる。南部町医療センターの市川万邦（まほ）所長は伯父の死を機に、「へき地で働く医者になりたい」と中学生の時に決意、その意志を貫く。今までのさまざまな取り組みが評価され、2018年にはへき地医療に尽力する医師を称える「第5回やぶ医者大賞」も受賞した。市川所長のこれまでを辿った。（2020年2月18日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら

——まずは、山梨県南部町とその医療環境について概要をお聞かせください。

南部町は山梨県の最南端に位置する山間の町で、北を除く三方は静岡県に接しています。現在の人口は約7600人で、私が南部町医療センターの所長に就任した2010年は1万1000人ほどでしたから、多くの山間部と同様に人口は著しく減っています。また、高齢化率は高く、2019年4月1日時点では41.7%で、これは県内27の市町村の中で5番目に高い数字です。南部町の北に接する身延町が4位（45.5%）、身延町の西に接する早川町が1位（47.3%）であり、南部町をはじめこれらの町は二次医療圏「峡南医療圏」に含まれますから、同医療圏は県内でも高齢化率の高いエリアと言えるでしょう。



南部町は山梨県の最南端に位置する（山梨県市町村総合事務組合ホームページ）

南部町には全部で5つの医療機関があり、このうち2つは町が国民健康保険の事業として設立した「国保直診」で、南部町医療センターと万沢診療所がそれに当たります。ほかの3つは開業医が運営する診療所です。それと、常に開いているわけではないのでカウントしていませんが、佐野地区という限界集落にも国保直診の佐野診療所があり、こちらは私が月に1度出張して診る際に診療所として機能しています。



市川万邦所長

——続いて、先生が勤める南部町医療センターの概要についてはいかがでしょう。

南部町医療センターは1989年に設立した診療所で、現在の常勤医は私1人です。非常勤医は6人いて、山梨大学医学部附属病院やほかの町外の病院から外科、整形外科、精神科、内視鏡を専門とする先生に来ていただいています。高齢化率の高い町ですから患者さんはやはりご高齢の方が多く、およそ8割が80歳以上で、最高齢は105歳です。残りはお子さんを連れのお母さんなどですね。1日の患者数は70人ほど。在宅医療も週に2日、半日ずつ行っていて、20人弱の患者さんのご自宅を月に30回ほど訪問しています。看取り数は年間に5~10人ほどです。

——「無医村で働く医師になりたかった」。先生の母校である自治医科大学の同窓会会報に先生の言葉が載っていました。

はい。私は「医者になりたい」以上に「へき地で働く医者になりたい」と考えていました。小さなころから父が「お医者さんはすごくいい仕事だよ」と話していたんですね。私の出身は山梨県の旧芦川（あしがわ）村（現笛吹市）で、父は村役場に勤めていたのですが、父が小学5年くらいのころにお祖父さん（父の父）が亡くなったため、進学を断念したそうです。父はどうやら医者になりたかったようで。

そんなことから漠然と私の頭に医者の道が浮かんでいたわけですが、「へき地の医者に」と具体化したのは中学2年ごろの出来事がきっかけです。伯父が山道で倒れ、そのまま亡くなりました。山に獣を狩りに鉄砲を持って家を出た伯父は、普段は帰宅する時刻になっても戻らず、村の人たちが搜索したところ山道で倒れているのが見つかったのです。芦川村には医療機関がなかったため、伯父は隣の旧御坂（みさか）町（現笛吹市）の病院に救急搬送されましたが、脳出血のために2日ほどして亡くなりました。

「村にもし医者がいれば伯父さんは助かったかもしれない…」そう思った私は駿台甲府高校を卒業後、地域医療に携わる医師を育てる自治医科大学に進みました。



南部町医療センターの外観

——自身の経験が発端だったのですね。それからはどんなふうにキャリアを重ねていったのですか？

自治医科大学はもともと、旧自治省（現総務省）がへき地医療に携わる医師を育てようとした大学です。学生は入学金や授業料がかからない分、卒業後は在学期間の1.5倍の年数を「義務年限」として、地元で地域医療などに携わ

る必要があります。私もそれは変わらず、1995年に大学を卒業後、2年間、山梨県立中央病院で研修を受け、1997年から2001年まで都留市立病院で内科に勤務し、2002年からは一人診療所である道志村国民健康保険診療所で総合診療や在宅医療に携わりました。義務年限が終わったのは2005年です。

——その後の進路が目にとまりました。また大学に戻っていますね。

私は小児科にも興味があり、また時代の流れから専門医を取っておいた方がいいだろうと考え、自治医科大学とちぎ子ども医療センターに2006年から3年ほど勤めました。その後は同じ栃木県にある国際医療福祉大学病院の小児科に1年ほど勤めました。こんなふうにして小児科の診療を専門的に学びつつ、資格の条件を満たして実際に取得したわけですが、その中で、「やっぱり自分は地域で働きたいんだ」という思いが強くなっていったのです。

目の前の患者さんが良くなるよう、力を尽くすのは素晴らしいことだと思います。それはそうだと思うのですが、実際のところ、病院の中だけで診療しても地域のことを深く知ることができないのも事実です。私は患者さんのご家族のことや地域とのつながりまで把握した上で診療したいのだと再確認しました。

そう思うのは、やっぱり私が田舎で生まれ育ったからでしょう。田舎で暮らす人は資源が少ない中で工夫しながら暮らしています。たとえば芦川村は無医村でしたから、村民は週に1度、出張診療所に行き、そこで医療を受けていました。

父にも影響を受けました。父は役場の職員として「村を守りたい」と強く思っていたようで、昼夜を問わず働いていました。夜も村の集まりに頻りに顔を出して、それが当たり前のように日々を過ごしていました。私に特別な言葉をかけてくれたわけではないのですが、父のそんな後ろ姿に感化されたのでしょうか。栃木県から山梨県に戻るときは、「へき地に生きる人がへき地で生き続けられるために、自分は医療の面からできることをしたい。おらが町の医者になりたい」。そう、強く思っていました。

◆市川 万邦（いちかわ・まほ）氏

1995年自治医科大学卒。山梨県立中央病院で研修を受けた後、都留市立病院や道志村国民健康保険診療所に勤務し、総合診療や在宅医療の経験を重ねる。自治医科大学の義務年限を終えた後は、自治医科大学とちぎ子ども医療センターと国際医療福祉大学病院で小児医療の経験を重ね、小児科専門医の資格を取得。2010年に南部町医療センターの所長に就任、行政や医療・福祉の多職種と協力しながらへき地医療に携わる。2018年にはへき地医療に尽力する医師を称える「第5回やぶ医者大賞」を受賞した。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

